

☆「小さなミステリー」

ゆか・クリステイ作(小二)

かえるくんのひょうじょうじょう      p.4

くまさんのダイヤモンド      p.10

ゆかさんの作品は、とてもリズムミカル。音読すると、森の住人のおしゃべりが間近に聞こえてくるようです。犯人探しのシーンにも、テンポの良いフレーズが効果的に配され、読み手を引き込む効果を生んでいます。推敲を重ね、より良い文章を紡ぎ出そうとする努力をいつも見せてくれるゆかさん。一つの助詞にも気を配り、完成度を高めています。シリーズの今後が楽しみです。

# ☆「宝さがし大冒険」

なおまさ 作(小三)

Chapter 1 p.14

Chapter 2 p.18

Chapter 3 p.22

忍者や恐竜に詳しいなおまさ君。そうした知識は、物語の中の随所に散りばめられています。なおまさ君の想像力は、海、空、天国など様々なシーンを描き出し、そこで登場人物をいきいきと動かします。短い文章を連ねていく表現方法が見られますが、この物語にはぴったりだといえるでしょう。また、数字への関心も高く、物語の仕掛けとして表現しているところも見事です。

☆「キラメキの国へようこそ 春夏秋冬物語

①

りん 作(小四)

第一章 春の国の王様

p.25

第二章 秋と春の話し合い

p.28

第三章 冬の国のできごと

p.32

第四章 キラメキの国VSエグサスキょうわ国

p.35

四季の名前を配した空想の国。りんさんは、そこに暮らすたくさんの登場人物を巧みに描き分け、彼らの心のうちを丁寧に表現してくれました。細やかな情景描写は、各シーンのコマコマを立体的に浮かび上がらせています。色彩の描写にとどまらず、音の描写などにもりんさんの工夫が感じられ、場面の空気まで伝わってくるようです。お話の続きを読むのが待ち遠しいです。

## 小さなミステリー

かえるくんひょうじょうひょうじょう

ゆか・クリステイ作(小二)

森のちいさなたんていじむしょ。そこではたらくミス・リース。

ある朝、うさぎのミス・リースが朝ごはんを食べていると

チリチリチリ。

電話がなりました。ミス・リースがじゆわきをとり、「もしもし、こちらたんていじむしょのミス・リースです。」

そついつと、話してきたのがかえるくん。

「ひょうじょうひょうじょうがぬすまれたんだ。いそいできてー」

チリーン。

電話はきれました。

かえるくんのおうちは豪邸ごうていで、ぼうはんカメラかめらは四つあつて、五かいまであります。にわには、だれでもじゆうに出入りできます。ミス・リースは大いそぎでしたくをすまして、かえるくんのおうちへ行いきました。

門もんの前まえにはかえるくん。かえるくんは、いまかいまかとまっています。ミス・リースがあいさつをするよ、

「きてくれてありがとう。ちよつと二つちにきてくれな

い?」

そついい、家なかの中に入いっていきました。

長ながいかいだんを上あがっていき、かえるくんが、ゆびをさしました。

「あそ二にひょうじょうじょうがあつたんだ。きのう水すいえいの大会たいかいにでて、二つじょうじょうになつたからひょうじょうじょうをもらったんだよ。あそ二にかざつたのに、ちよつと目めをはなしたすきになくなつていたの。」

かえるくんがそういつと、ミス・リースは、

「何かてがかりなどはないのですか？」<sup>なに</sup>

「それだったら、テーブルの上にこれが……。」

ミス・リースは手紙のないようをよみはじめました。

「ひょうしょうじょうは、わたしがぬすんだ。かいとうX

XX」

ミス・リースは、

「あのほうはんカメラを見せてくれますか。」

と言いうと、かえるくんは

「いいですよ。」

と言ったので、ほうはんカメラを見せてもらいました。

そしてミス・リースが、

「ちよつと電話をおかりしますね。」

そう言い、ほうはんカメラにうつった三人をよびに行きました。

うつっていたのは、あひるさん、りすさん、やぎさんでした。にわにせんいんあつまったとき、ミス・リースはし

つもんをしました。

「あひるさん、ちつきはどりに行<sup>い</sup>ったのですか。」  
あひるさんは、

「わたしは、おかいものに行っていました。」

「そうですか。」

そう言<sup>い</sup>つと、

「りすさん、あなたはどりに行<sup>い</sup>っていたのですか。」

「わたしは、食<sup>た</sup>べものがなかったので、りんごの木<sup>き</sup>へ行<sup>い</sup>って、  
りんごをとっていました。」

そう言<sup>い</sup>つと、

「じゃあ、やぎさんあなたは、何をしていましたか。」

「わ、わたしは、ちよっ、ちよっとさん歩<sup>ほ</sup>をしています  
た。」

「そうですか。では、はん人のような人が二人いますね。

それは、りすさんとやぎさんです。」

「な、な、何ですか。」

二人は同じ<sup>おな</sup>に言<sup>い</sup>いました。

「では、まずりすさん。なぜそう思ったかというより、」  
「りん」の木なんてないからです。」  
そう言われると、「」にはりん」の木なんてありません。  
けれどりすさんは「」言いました。

「いえ、わたしはもうす」とおいらと「る」にあると「」  
いるのです。ほら、今しゃんをもってきています。「」  
なかんじです。」

そう言つと、「ミス・リリースは

「そうなんですか。ではやぎさんですね。」

「な、何で？」

「それは、ほうはんカメラを見ればわかります。」

そう言い、ほうはんカメラを見せました。

「ほら、「れのほうつとしてますよね。」

「」。」

「そして見てらるよ、だんだんこのほうつらるのです。」

そう言つと、「やぎさんとはどげんをこつ言いました。」

「すみません。ちつきおながすいたな〜とおもって歩

「いらしたらあんなとろにかみがあったのでっ。い。」

「では、なんで手紙<sup>てがみ</sup>などを書<sup>か</sup>いたのですか。」

「だってかいたらさがすのにむちゆうではんにんなんかわすれてしまつとおもったからです。ほんとうにすみま

せん。」

かえるくんが

「いよ。」

と行ったと同じにやぎさんのおなかが

「グ~~~~。」

「あっ。」

「あはは、おなかがすきましたね。だってもう十二時<sup>じふにじ</sup>三十分<sup>さんじゅうふん</sup>ですもんね。みんなでお昼<sup>ひる</sup>にしましょうか。」

そついつてみんなでお昼<sup>ひる</sup>はんをたべました。

## くまさんのダイヤモンド

「こは、森もりの小さなたんていじむしょ。そこではたらく  
ミス・リース。

ある夏なつ、ミス・リースが朝あさごはんを食たべていると、  
チリチリチリ。

電話でんわが鳴なりました。ミス・リースがじゅわきをとり、  
「もしもし、こちらたんていじむしょのミス・リースで  
す。」

それに出でたのはくまさんでした。

「ダイヤモンドがぬすまれたので、すぐに来きてー！」  
チリーン。

電話はきれました。

くまさんは、はちみつ会社がいしやの社長しやうちやうです。すぐにしたく  
をすませ、ミス・リースは、くまさんの家いえに行いきました。  
くまさんの家に入いって、あいさつをするよ、

「まあ来てくれてありがとうー昨日、ダイヤモンドをきんこの中に入れて、832というあんしょう番号にしたの。」

すると、ミス・リースは、

「昨日は、外に出ましたか?」

と、質問しました。くまさんは、

「いえ、昨日は外に出していません。けれど夜はまどをあけていたので、きっとはん人はそこから入ったのでしょう。」

あっ!「」に、鳥の足跡があります。これが手がかりになりますか?」

ミス・リースは

「ちよつと電話をおかりしますね。」

と言い、すすめさんと、はとさんとカラスさんをよびました。そしてせんいんに「」言いました。

「みなさん、「」の足跡をふんでください。」

まずふんだのは、すすめさん。けれどすすめさんの足には大きすぎました。つぎにふんだのははとさん。けれど

はとさんの足にも大きすぎました。さいごにカラスさん。すると、なんとぴったりだったのです。

「すみません!」

カラスさんがそう言うと、ミス・リリースは

「どうしてあんしょう番」うがわかったのですか?」

「それは、くまさんが入れたあんしょう番」うをすいりしたからです。くまさんの会社ははちみつ会社なので、8(はち)と3(み)と2(ツ)だと思いました。」

「では、そのダイヤモンドをかえしてくれませんか。」

「はい、わかりました。」

カラスさんは、ダイヤモンドをかえしました。

くまさんは、

「ミス・リリースさん、一つダイヤモンドをもつて行ってください。これはダイヤモンドをとりかえしてくれたおれいです。」

と言いました。そしてはとさんとすずめさんにもダイヤモンドをわたし、

「はとさんとすずめさんをうつたがってしまったので、これはおわびです。」

と、言いました。カラスさんには、

「カラスさん、はちみつ会社ではたらいてくれませんか。

カラスさんは頭がいいので。そうしたら一か月に一回、ごっかいダイヤモンドをあげます。」

「え？いいんですか？」

「うちの会社はひどくないので、入ってもいいですよ。」

「では、はちみつ会社に入ります。」

「うう、ごんかい今回のじけんはまくをとじたのでした。」

おわり

# 「宝さがし大冒険」

なおまさ 作(小三)

## Chapter 1

ほくは虎之助。お金持ちだ。ある日、家に帰ったとき、宝の地図を見つけた。説明には、「この地図どおりに行けば、宝島につく」と書いてあった。

外に出て、船を買った。まちの人全員に、いっしょに来てくれるか聞いた。すると、全部で三十二人あつまった。友だちの忍者も呼んだ。名前はハットリだ。忍犬の電太郎も来た。「光ばくだんのじゅつ」が、必殺わざだ。仲間は、三十三人と一ぴきになった。

船は、宝の地図どおりに進んだ。海のまんなかで、ライバルのかいぞくのザルドと、ザルドだいしゅうだんに会った。相手も同三十四人。ほくが、けんをつかってザル

ドをたおしたので、三十三人は味方みかたになった。

嵐あらしにあった。船がこわれはじめる。ガガガガン。船は、宝島のとなりの悪島あくしまへ行ってしまった。船はかんぜんにこわれてしまい、みんなで力をあわせてほかの船をつくった。また船にのり、ぶじに宝島につく。

宝島にはジャングルがある。そのおくのおくに小さな家がある。どんどんいくと、人食ひとくいいばな花の花畑がある。人食しょつかい花には消化えきがあつて、人をとかす。忍犬電太郎が光のばくだんを投なげて人食ひとくいい花を半分はんぶんやつつけた。友だちの忍者ハットリが刀で人食ひとくいい花を切つてすすんでいった。

やっこの「J」で宝のある家までたどりついた。その家の中には、紙かみがはりつけられている。船長せんちやうのほくがみつけた。読よんでみると、「こんなことが書かれていた。」か

ぎさをさがせ。かぎは「」の島のずいっとまんなかにある。

「ヒントはぶかくほれ。」

地図で真ん中をさがし、ヒントでさしてそこへむかった。

でもシャベルがなかった。船長のぼくは、小さくなって持<sup>も</sup>ち運<sup>は</sup>べるシャベルを発<sup>は</sup>明<sup>めい</sup>してポケットへ入れたことを思い出した。シャベルは百<sup>ひゃ</sup>こあった。そのうちの六十四こをつかった。それでみんなでほった。みんながつかれたところでかぎがみつかった。

また、宝の家にもどり、ドアをあけた。すると、宝の家の中には、その宝を守る人がふたりいた。ぼく虎之助と、友だちの忍者ハットリと、あいぼうの忍犬電太郎が、戦<sup>たたか</sup>った。ぼくは得意<sup>とくい</sup>のけんぼうを使い、ハットリはしゅりけんで戦った。電太郎はとくいわざのばくだんを使つて戦った。ほかのみんなは、シャベルでかぎを見つけるのにつかれていたから、休んでぼくたちを見ていた。そし

て、「がんばれ！」といった。ぼくたちが勝った。

とうとう宝箱を見つけた。そしてかぎをあけた。あけたら、宝物といっしょにマップが入っていた。それは新しい宝を見つける地図だった。

そして次のぼうけんがはじまる。

たから ちず ひこうき え

室の地図には、飛行機の絵がかいてあった。ぼくた

おお

ちはその地図で飛行機をさがし、大きな飛行機を見つ

はま

けた。その飛行機をみつけたのは浜べだったので、ふねが

よんじゆうにん

きた。ふねで人が四十人やってきた。さっきまでは

ろくじゆうにん

ひやくにん

なまえ

六十人だったので、今、百人になった。ぼくは名前を

か

「くまわか」に変え、そしてみんなの名前を「さいがしゆ

う」にした。そしてその百一人は飛行機に、にもつなどを

入れ、とびたつた。

くも そら

雲が空いっぱいにきた。その雲に飛行機がつつまれて

と

れんしゆう

くろ

きょだい

しまった。そこに飛ぶ練習をしていた黒い巨大かぶと

と

むしがとんできた。巨大かぶとむしは飛ぶのがにがてだ

ったので、うまくコントロールできずにぶつかってしまっ

ひこうき はんぶん

た。そのせいで、飛行機は半分こわれてしまつて、ジエッ

ちから

うしな

きょだい

トきのうの力を失ってしまった。巨大かぶとむしはき

うみ

ぜつして、海におちてしずんでいった。

そうじゆうつぶのうになった飛行機がおちていくさきには、島しまがあった。ちやくりくきのうが残りのこっていた飛行機は島にちやくりくできた。そこでぼくが發明はつめいしたロボットで、飛行機を直なおした。そしてふたたびとびたち、天国てんごくへ行いった。

天国にしのびこんだ。天国はすこしふかふかだった。トランポリンと同じくらいふかふかだった。けれども見つかからないように、ジャンプはしなかった。そしてそのまま気づかれぬように宝のあるばしょへ歩いて行った。

宝のばしょについた。そこにはいろいろな色いろのにじがあった。にじの近くには宝をまもる人がいた。ぼくたちは、十時間じゅうじかんくらいたたかかって、ぼくたちが勝った。宝箱たからばこをあけようとしたら、風魔党ふうまとうとシライヤが宝箱の下から出てきた。そして、十二時間くらいたたかかって、ぼくたちが勝った。宝箱をなかまのひとりがあけようとしたしゅ

んかん、かぎあなからネットがでてきた。そのせいで、あ  
けようとした人は動けなくなってしまうた。ほく、くま  
わかが、どうして「ううしかけになるのかを見るため  
に、宝箱のまわりを歩いた。すると、宝箱のうしろに  
数字が書かれているのを見つけた。ほくは、「これはあん  
しょうばん」うをいれるばしよだぞ！」と言った。

みんなは考えに考えた。ほくは思った。(ボスのなま  
えがジライヤだ。「ジ」と「ラ」はどの数字にもないから、  
「0」そして、「イ」と「ヤ」は数に関係しているので、「1」  
「8」だ。だから、0018だ！)ほくが0018と入力し  
たら宝箱が開いた。ほくたちは、中を見た。そこには、  
もう一つの宝の地図があった。

そして、最後のぼうけんが始まる。

## Chapter 3

地図をもってぼくたちは、ぼくたちの島へ行った。家に帰り、地図を見た。そこには、はつめい発明しなければならぬいものを書いてあって、それは、タイムマシンだった。もう一つ書いてあったのは、「サンニド山」のどっくへつたある」という暗号のような文だ。ぼくは、地図の中には、「サンニド山」がなかったので、考えた。(もしかしたら、サンニド山は、三三が六、なのでロクド山かもしれない)と思ひ、ロクド山をさがした。すると、地図にあった。

そして、てつやでタイムマシンを作り、三日後にタイムマシンができた。ぼくの友だち、ハットリと、忍犬電太郎と、ハットリの友だち、くのいちツバメといっしょにタイムマシンにのつた。タイムマシンで、過去に行くよつにそつた。

一分後、はくあき白亜紀についた。そしてついた島を三人と一

匹で探検した。たくさんジャングルがあり、そのうしろには山がたくさんあった。地図を見ると、「ニムン入ん」というところまで来た。

「あともう少しなんだけどなあ。」

と、ぼくが言った。ハットリとツバメが地図を見て同時に言った。

「あ、ほんとだ!」

そしてもう少し歩くと、ロクド山が見つかった。その下には、大きな大きなほら穴があった。

「ニムンの中にきよつりゆつドラゴンがいるはずだワン」

と、電太郎が言った。

かいちゆうでんとつを持ち、ほら穴に入っていくと、

きよつりゆつドラゴンがいた。

「きよつりゆつドラゴンだ——!」

と、全員がさげんだ。

全員が武器を持ち、たたかい始めた。ぼくはじゆうで

たたか  
しゅりけん  
戦い、ハットリは手裏剣で戦い、電太郎は電気ของソード  
で戦って、くのいちツバメはくさりがまで戦った。

十時間でやっと、きょうりゅうドラゴンが死んだ。地  
図を見ると、きょうりゅうドラゴンの肉にくの中にあると書  
いてあったので、肉あを開けながら探さがした。肉はかたかつ  
たので、探すのに苦くろ勞した。二分後、宝箱を見つけた。前  
に見つけたかぎで開けると、きらきらした宝があった。

そして、タイムマシンに宝をつめこみ、帰って、ぼく  
はもっとお金持ちになったとさ。

おわり

# 「キラメキの国へようこそ 春夏秋冬物語①」

りん 作(小四)

## 第一章 春の国の王様

キラメキ国は春、夏、秋、冬という国があつまってできた国です。

春の女王、メレエーナは「春」という国を大切にしていました。春の国は長いこと、秋の国とけんかばかりしていたため、メレエーナはずっと「まっっていました」が、たすけてくれる人はだれ一人いません。だからキラメキ国はあれていました。おしろはいつも深いきりにつつまれています。

やがてキラメキ国をよみがえらせようというチームができました。春の国の王様も、

(もうキラメキの国ではない、じいじの国になってしまっ

た。)

と思い、チームの一人になりました。

「もうむりだ。じごくの国をよみがえらせなければなら  
ない。そういう時間が来てしまったんだ、メレエーナ。」

王様はメレエーナに言いました。

「でも、そんなこと言ったって。」

春の国は秋の国と長いことけんかをしていたので、メレエ  
ーナは話し合いをするのがこわかったのです。だから、  
いそいで古びたレンガでできた塔の一番上の自分のへや  
にとじこもってしまいました。そしてベッドに顔をおしっ  
けてなきました。

そんなことは知らないむすめのリーサは、おしろ中お  
母さんをさがしながら、「ママはどこ?」と聞いて足音が  
ひびくろうかを走り回るのでした。召使いたちはもちろ  
んメレエーナがへやにとじこもっているのはしっています。  
しかし王様はメレエーナを一人にしてあげたいと思い、

召使いたちに、リーサにはメレエーナのい場所を教えてはいけないといっていました。だから召使いは、リーサに王様の所へ行くようにいいました。

「お父様。なぜ召使いたちはお母様のい場所をうちあけられないのですか？そしてなぜわたしがお父様の所に行きなさいと言われるのですか？」

リーサはひといきで言いました。王様は、

「それはなあ……。」

としか言えませんでした。リーサは言います。

「わたしはさつき、秋の国の王女ネレアとその国のお父様とおきとまきとま、つまりネレアのお父様とお母様に、「あいさつをした時、」「ちそうをふるまってもらいました。」

リーサとネレアは仲がよく、子どもどろしでよくあそんでいました。だから、リーサとネレアはお互いにお城を行き来できたのです。リーサは続けます。

「その時、ネシアのお父様から、春の国の王に「これから仲良くしたいんだが、とつたえてくれってでんごんを言い渡されたのです。私は、お父様とお母様がたいそうお喜びになると思い「こ」にきました。二人に同時にしらせなかったのです。」

王様はなきながら、

「リーサ「めんよ。」

と言って、召使いに馬と馬車を用意させました。馬は、白い羽根のはえた上等な馬でした。馬車は光り輝く黄金で、すわり「こ」ちの良いソファアールが中にありました。そして、王様は泣いているメレエーナを部屋から連れ出し馬車に乗せました。自分も乗りこみ、馬にはリーサを乗せて秋の国へ向いました。

## 第二章 秋と春の話し合い

二十キロもほ「ほ」道を行き、秋の国にようやくつき

ました。そこではおきさまのソーナが召使いたちにごちそうを用意させていました。「うづかなテーブルにおいしそうなりよづりがずらりとならんではいるのに、秋の国の王、キュルトはそわそわしてばかりです。

「ねえ……あなたも心配していないで少しは落ち着いたら……？それにネレアもリーサと遊べるって喜んでいるんだし……。」

ソーナが少しひかえめに秋の国の王、キュルトに言いました。キュルトもソーナも乗り気ではありません。だってずっと春の国とけんかしていたのですから。

「マーマーリーサたちが来たわよー。」

「ありがとうーネレア。」

そして門の前までむかえに行くと、春の国の王様シヨネルが、

「う、これは。うざったじいままま……す。」

と言つと、ソーナが、

「まあ中に入りましょう。わたしたちもあなたも今まで何をしてきたのでしょっねえ。」

「ううしてジヨネルはときどきしながらおしろの中に入っていました。」

ソーナはメレエーナといっしょにおしろのかいだんをのぼりながら言いました。

「メレエーナ。いつも本当にごめんなさい。国どうしがけんかしてたのも、全部あの人たち、キュルトとジヨネルのせいなんだから。」

「ええ、ありがとう。」

メレエーナにも笑顔がもどってきました。メレエーナがおしろのまどからにわを見ると、ネレアとリーサがはしやぎながらあそんでいます。

「うぶぶあはは。次は何をする？」

「ひみつきちを作るうう……！」

「さんせい……！」

二人は、話しながら走って行ってしまいました。

「子どもたちはけんかなんかしなかったからいいわねえ。」

ソーナはほそりと言いました。

「そうね。」

「メレエーナさま、ソーナさま！キュルトさまとジヨネルさまがおよびで！」といます。」

二人がかけつけると王様たちが、

「なあ、仲直りをしようじゃないか。おたがいさまなんだから！それにぼくも悪かった。」

「そうねえ、仲直りしてよかったわ。でも勝手にけんかしていたのは、あなたたちよー！」

「ううして二つの国は仲直りをする」ことができました。

春の国と秋の国がけんかをしていたころとはまったく別の国のようです。あれはた土地だった二つの国は、も

とのきらめき園にもようるじよができました。

### 第三章 冬の国のびきじよ

「あのわたしそんな…。」

今、冬の国では王女のミーサのけっこん相手、ネルタ王子がおみあいじよしているのです。

「どうしてぼくとけっこんしてくれないのですか？」

ミーサはこの人と結婚したくありません。ミーサはもう何時間も前からずっとこの王子のわがママをがまんしてきいていたのです。ミーサは

「はあ。ありがと。じゃあさようなら。」

と行って、ミーサの父ルガサと母ミールの所へいきました。ルガサとミールは次の旅行の飛行機の席のことを話していました。

「ママ、パパ。どうしてネルタ王子となの。」

「あら。たまたまネルタ王子がお見えになったからね。」

「そうだ。ミーサはあの人きらいなのか？」

「ええ……。」

おしろのげんかんのベルがなりました。

するといきなり夏の国の王女、エミリーがとんできい、

「ミーサ、パパママがきょうパーティーをひらこうとまら  
らう……。」

「やった……じゃあ、ママ、パパ、行ってきよう……。」

「ううん、ううん、ううん……。」

「はあ……。ミーサはもうな。」

「そうね、昔はずっとおしろにいたのよね。」

ポーン……

「な、なんだ。いきなりたいほつか……。」

「えっ何？」

「まちがいなくたいほつだ。へいしを出せ。早くめしつか

らう……。」

たいほうは、となりの国の悪の大王、エグサスが、大臣のセメルサスに命令してうたせたのでした。

「平和を止めろ！平和は悪の中の悪だ！」

ぐんのリーダーであるセメルサスは言いました。

わーっ

たたかいの始まりです。悪のまくが開かれたのでした。

「ケツ。ルガサがおこったって、こっちにはおくの手があるんだ。世界せいふくだったてかんたんさっ。」

エグサス大王が大笑いで言いました。

「うふふ。早くドラマが見たいわ。」

エグサス大王のつま、アンナ・エグサスが言いました。

エグサスぐんはとても強く、ルガサぐんのへいしがどんどん死んでいきます。エグサスぐんは大勝利。

しかし、頭のいいルガサは次の計画に目を通していま

した。夏の国の王ウォルンぐんはだれも勝つことができない軍と言われていたので、ルガサは

「ウォルンぐんと組めばエグサスに勝てるんでは。」

さっそくルガサはウォルンに連絡してきょうりよくをもとめました。

「ああいいとも。もちろんさんせいするさ。私もエグサスぐんをたおしたいしね。」

ウォルンはあたりまえのように「たえました。そして春、秋の国にも連らくし、きょう力をもとめてくれました。」

「わたしたちがさんせいしないはずがないではないか？」

「キラメキの国が悪とたたかうのか！それは楽しみだ。」

「ありがとう。本当にありがとう。」

#### 第四章 キラメキの国VSエグサスキょうわ国

キラメキぐんのリーダーであるジヨネルはきびしいち

ようついで言いました。

「さくせんを「れからつたえる。

①エグサスぐんをとりか「む」と。

②かこんで、すぐたいほうをうつ」と。

③うって次々にエグサス大王のへいしが死んでいってしまつてもゆだんしない」と。

大事なのは、おたがいなきよつりよくしてたたかつことだ。分かったな！」

うづく

たたかいは、作せんとおりにすすみませす。そしていよいよ最後の時、とんでもないことがおきるのです。

さて、つづきは、「キラメキの国へようこそ春夏秋冬物語

②」でお話します。続きもぜひ「らん」になってくださいね。